

京都創成大学授業評価における改善方向と結果報告

2007 年度前期 Semester 授業アンケート集計から

Direction of improvement and result report in class evaluation of Kyoto Sosei University

The class questionnaire in total of the semester of the first term in fiscal year 2007

栗生 実・池田 広子

要旨

全ての大学にとって、FD につながる「学生による授業評価」は重要な施策となっている。そのため京都創成大学でも、継続的に実施してきた授業評価を 2007 年度に変更・改善し、それに基づき前期 Semester の授業評価を実施した。結果は 5 段階評価で全体平均 3.87 と良好なものであり、詳細な分析でも授業改善に重要と推測される項目群が明らかになるなど得られるものが多かった。今後はこの集計結果の分析に基づき、さらに授業評価の改善を進め、本学の授業改善・FD を組織的に推進していくことが求められる。

キーワード: 京都創成大学、授業評価、学生による自己評価、FD (ファカルティ・ディベロップメント)

Keywords: Kyoto Sosei University, Class evaluation, Self-evaluation by student, FD (Faculty Development)

1. はじめに

大学全入時代を迎え、大学が生き残る上で自らを高める努力が必要不可欠となってきた。本学(京都創成大学)においてもそれは同様であり、その一つとして学生による授業評価を実施し、大学・教員の FD (Faculty Development ; ファカルティ・ディベロップメント) を図っている。

文科省によると、「学生による授業評価」はここ 10 年で多くの国公立大学において実施されるよ

うになってきた⁽¹⁾。2007年度は前年度より全体としての実施大学は減っているが、それでも508大学(約71%)において学生による授業評価が実施されている(2006年度は691大学で約97%)。このように学生による授業評価は、大学の授業改善を図る上で常に活用される手法の一つとなっている。

本学でも、2000年度の開学から継続的に学生による授業評価を実施している⁽²⁾。これまで評価票の質問項目については、多少の質問項目の増減や文言の変更などはありながらも、2006年度まではあまり大きな変更を加えずに実施してきた。しかしながら、2007年度は質問項目の見直し、項目区分の追加、実施方法の変更など比較的大きな変更を行った。

本論では、2007年度授業評価を実施するにあたって行った評価票や実施方法の改善点の説明と、2007年度前期に実施された授業評価の集計結果の分析を主要な課題とする。ただし、改善点と集計結果の関係の分析により改善の効果を確認するものではなく、改善点の説明と集計結果の分析は切り離して記述していく。

2. 2007年度授業アンケートにおける改善方向

2.1. 京都創成大学と授業評価について

京都創成大学は経営情報学部を構える単科大学であるが、今回の授業評価を行った2007年度から学科構成が変わっている。2006年度までは経営情報学科だけであったが、2007年度からは経営情報学科をビジネスデザイン学科へと名称変更し、新しく医療福祉マネジメント学科を加え2学科とした。ビジネスデザイン学科は、中核となる経営と情報に加えて地域、観光を軸に幅広く専門を展開した学科である。医療福祉マネジメント学科は、診療情報管理士などの医療事務系資格を主要な目標とし、医療機関・福祉機関の経営・管理・事務について学べる学科である。

本学では、開学した2000年度からほぼ毎セメスターごとに授業評価を実施し、その都度集計結果を個票ではなく、担当授業ごとの集計結果と自由記述欄の記載一覧を、全体結果と共に授業担当教員に報告してきた。2007年度に至るまで、質問項目の多少の増減と文言の変更や実施方法の変更をし

(1) 文部科学省高等教育局大学振興課『大学における教育内容等の改革状況について(2005年度・2006年度・2007年度)』。それぞれ2005年3月、2006年6月、2007年4月。

(2) 京都創成大学は、福知山市(京都府)との公私協力方式により2000年4月に前身の京都短期大学商経科(学校法人成美学苑)を改組転換し生まれた大学である。京都短期大学の時代から授業評価は実施されているが、本論では京都創成大学における授業評価を中心に進める。また、本学では2006年度まで実施されていた授業評価を「授業評価アンケート」と呼び、2007年度は「授業アンケート」と呼んでいるが、ここでは「授業評価」で統一する。

ながらも、ほぼ一定した内容で実施され続けてきた。

2007年度の授業評価は、2006年度まで行われたものを元に、幾つかの点でより良い授業評価にするための変更を行った。それは、評価項目の変更と分類区分、学生による評価票の回収、留学生向け評価票の作成・利用、評価対象科目の拡大である。

以下では、評価項目の変更と区分を置いて、それ以外の改善点から詳細を説明する。

2.2. 授業評価実施上の改善点

まず第一の改善点が「学生による評価票の回収」である。授業評価は授業をより良いものにするための物差しのようなものであり、正確に評価できて始めて授業の改善につながる。正確な授業評価のためには、学生が自由にその授業を評価することが保障される必要がある。しかしながら、学生は授業評価の結果が自分自身の成績評価に影響を与えることを心配し、担当教員にへつらうために高い評価をする可能性がある。あるいは、低い評価を下せないという事態に直面する場合もある。同様に学生の自由な評価に影響を与える要素として記名制があるが、実際に記名制では自由な評価が保障できなくなることが指摘されている⁽³⁾。以上の点から、学生の自由な授業評価を保障することは授業評価にとって非常に重要である。

そのため、本学でも授業担当教員向けの実施マニュアルに、学生の評価内容が授業の成績評価と一切関係がないことを口頭で説明するように記載している。加えて、本年度からは回収後に担当教員が評価票に直接接触することがないように、回収に関わる作業を当該授業に出席する学生に担当させている。評価票を回収し、それを評価票と共に教員に配布した封筒の中に入れ、厳封する作業までを学生に行わせ、その後の大学への提出は教員が行っている。また、集計後、個票を教員に渡すことはなく、渡すのは全体の集計結果と担当個別授業の集計結果、自由記述欄の記載一覧のみである。

第二の改善点が「留学生向けの評価票の作成」である。授業評価において評価票のレイアウトや質問の文言は、学生に正しく理解され正確な評価が行えるように細心の注意が払われている。例えば、質問項目の先頭に出席状況や学習態度など学生自身の自己評価を回答させ、その上で客観的に授業評価をできるように評価票をレイアウトする工夫などもある⁽⁴⁾。

そこで本学では、日本語の評価票に対する慎重な検討は当然のことながら、今回は本学の留学生の

⁽³⁾ 吉川歩 (2007) 「出欠の個人認証と授業評価の匿名性を両立する出欠・評価収集システム」『甲南会計研究』第1号, pp.69-77. ただし、ここでは記名制による成績評価への影響を心配する声は、それほど多くはない。

⁽⁴⁾ 自己評価と授業評価の関係については、自己評価を先行させると総合的な授業評価が低く行われていることも指摘されているため、慎重な検討が必要である。松田文子・三宅幹子・谷村亮・小嶋佳子 (1999) 「学生による授業評価と自己評価、授業選択態度、及び成績の関係：教職必修科目『生徒指導論』の場合」『広島大学教育学部紀要』48号, pp.121-130.

中でも最も多くを占める中国語圏の留学生向けに、中国語に翻訳した調査票を作成し利用した。今回の授業評価では、該当する留学生に全ての授業においてこの評価票を配布するまでには至らなかったが、サンプルとして用意し日本語の評価票では適切に回答できない留学生は、この評価票を参考にしながら回答できるように準備した。

第三の改善点は「評価対象科目の拡大」である。2006年度までの授業評価については、ゼミなどの演習科目、実習科目を除いた授業科目を対象に授業評価を行っていた。その理由として、板書や配布プリントについての質問項目が回答しにくいなど、準備した評価票と授業の実情が適合しない実習などの授業科目があったからである。しかしながら、2007年度授業評価ではそのような課題があることも含めて、全ての授業科目を評価対象とした。評価票との適合性が疑われる授業科目の扱いについては、今回を含めた数回の授業評価を通じて判断すべきだと考えたからである。

以上が評価票の変更を除いた2007年度授業評価での改善点であるが、次は評価票そのものの変更について言及する。

2.3. 評価票の変更と質問項目区分の作成

2006年度の授業評価票は、集計作業の短縮を図るために質問数は8項目と、それ以前の評価票に比べ比較的軽量の評価票を使用した。しかしながら、評価票の回答結果の入力作業はOCR（光学式文字読取装置）を利用しているため、評価票の枚数が増えない限り質問数を増やしてもそれほど負担は増大しない。そのため、レイアウトを工夫することで質問数を15項目へと増加させた。併せて、各評価項目をその特性ごとに分類区分した。

2007年度授業評価に利用した評価票の評価項目と評価項目の区分は、以下の表1の通りである。全ての項目は5段階評価で回答を求めている。「5」を「強くそう思う」とし、「3」を中間とし、「1」を「そう思わない」としているが、評価項目15だけは出席状況を聞く質問であるため「5」を90%以上の出席とし、70-80%、50%、40-30%、20%以下の五段階に出席率を区分して回答を求めている。

以上の評価項目に加えて、フェイスシートとして「学年」「学科」「留学生であるかどうか」から個人属性を取得し、さらに当該授業についての自由記述欄を設けている。

以下の表2は、評価項目の全15項目を質問内容の性格により5種類に分類区分したものである。これは、個々の評価項目の性格を明確にすることにより集計結果の分析をより有意義なものにし、教員の教授法改善につなげやすくするためである。

表1 評価項目および評価項目区分

	評価項目	項目区分
1	この授業を登録するとき、シラバス（履修の手引き）は役に立ちましたか。	B) 授業の準備や工夫 (教材・設備の充実)
2	シラバスの内容は、実際の授業とほぼ同じですか。	B) 授業の準備や工夫 (教材・設備の充実)
3	この授業の開始時間、終了時間はほぼ守られていますか。	A) 授業全体
4	授業の進行速度（速い、遅い）は、丁度いいですか。	C) 授業の様子 (指導の仕方)
5	この授業は、役に立つと思いますか。	E) 授業の学生への効果 (理解度)
6	教員の話し方は聞きとりやすいですか。	C) 授業の様子 (指導の仕方)
7	教員の準備がよくされていると感じられる授業ですか。	B) 授業の準備や工夫 (教材・設備の充実)
8	この授業で要求されるレポートなどの課題は適切ですか。	A) 授業全体
9	授業中、発言、自主学習、作業などの学生の参加ができていますか。	A) 授業全体
10	教員は学生の質問や意見に対応してくれていますか。	C) 授業の様子 (指導の仕方)
11	この授業は、全体的に満足していますか。	A) 授業全体
12	板書、プリントなどで、授業は効果的だと思いますか。	C) 授業の様子 (指導の仕方)
13	マイク、スライド、パソコンなどの機材が、効果的に使われていますか。	C) 授業の様子 (指導の仕方)
14	あなたは、この授業に意欲的・積極的に取り組んでいますか。	D) 学生自身の状況 (達成度・自己評価)
15	あなたのこの授業の出席率は、何%くらいですか。 ※ [5] 90%以上 [4] 70-80% [3] 50% [2] 40-30% [1] 20%以下	D) 学生自身の状況 (達成度・自己評価)

表2 評価項目の項目区分

区分	項目区分	評価項目
A	授業全体	Q3 Q8 Q9 Q11
B	授業の準備や工夫	Q1 Q2 Q7
C	授業の様子（指導の方法）	Q4 Q6 Q10 Q12 Q13
D	学生自身の状況（達成度・自己評価）	Q14 Q15
E	授業のあなたへの効果（理解度）	Q5

個々の評価項目の変更・追加点を、項目区分ごとに見ていく。まず「A. 授業全体」という項目区分を見ると、評価項目8の「授業で課される課題の適切さ」、評価項目9の「学生参加的な授業運営」が追加された。「B. 授業の準備や工夫」という項目区分を見ると、評価項目1の「効果的なシラバス」についての質問が追加された。それまでは質問項目2の「シラバスと授業進行の適合」のみであったが、この項目を追加することによりシラバスの意義をより詳細に検討することができる。また、質問項目7の「教員の準備」が追加されたが、これは教員側の熱心さを測る項目となるであろう。「C. 授業の様子」という項目区分を見ると、評価項目4の「授業の進行速度」、評価項目6の「教員の話し方」、評価項目13の「設置機器の効果的使用」が追加された。「D. 学生自身の状況」という項目

区分を見ると、評価項目 15 の「出席率の自己評価」が追加された。これにより、学生の授業への積極性をそれまでの精神的なもの（項目 14）に加えて、肉体的なもの（項目 15）からも把握できるようにした。「D. 学生自身の状況」という項目区分を見ると、評価項目 5 の「授業の効果」が追加された。

授業の全体評価項目としては、評価項目 5 の「授業の効果」と評価項目 11 の「授業への満足度」が該当する。これと、他の評価項目の関係を分析することが、授業改善につながると考えられる。今回は、評価項目 5 で授業を受けたことによる効果（スキルの上昇・知識の獲得など）を追加し、評価項目 11 で授業を受けたことによる満足とあわせて評価できるようにした。

また、上述したように評価項目の質問する順番は授業評価の結果に密接に関連する。その観点から考えると、質問内容のレイアウトをどのようにするかという検討が、少々不足していたのでないかと反省する。それは、来年度以降の課題としたい。

2007 年度授業評価は、以上のような評価票と実施方法の改善を図った上で実施された。その集計結果の分析については、次章にて言及する。

3. 2007 年度前期 Semester 授業評価の集計分析

本論の対象となる授業評価は、2007 年度前期 Semester の開講授業を対象に、6 月 25 日から 7 月 6 日の間の授業時間内に実施したもので、授業回数としては 10~11 回目に該当する。その他の授業評価実施上の詳細は、上述したとおりである。対象者は、授業評価実施日に当該授業に出席した学生である。授業評価票を回収できた授業は 118 で、担当教員の総数は非常勤も含めて 41 名。授業科目履修登録者総学生数は 3,635 名で、そのうち 2,274 名 (62.6%) から評価票を回収できた。

3.1. 授業評価の単純集計結果

全授業を対象とした総合評価では全 15 項目の評価平均は 3.87 であり、回答者の分布は評価 5 (37%)、評価 4 (25%)、評価 3 (31%)、評価 2 (4%)、評価 1 (3%) であった。全体としては、ほとんどの評価項目で平均以上の評価を得ている (表 3 を参照)。授業の全体評価項目と考えられる項目 5 「授業の効果」は 3.90、項目 11 「授業への満足度」は 3.81 と平均以上の評価となっている。

高平均の上位 3 項目をあげると、項目 15 「出席率の自己評価」が 4.23、項目 7 「教員の準備状況」が 3.91、項目 5 「授業の効果」が 3.90 の同率である。教員の授業への熱意を表すであろう項目 7 と、授業を受けたことによる効果と理解できる項目 5 が含まれていることは、喜ぶべき結果であると考えられる。

低平均の下位 3 項目をあげると、項目 13 「設置機器の効果的使用」が 3.68、項目 1 「効果的なシラバス」が 3.72、項目 8 「授業で課される課題の適切さ」が 3.77 と、中位の 3.0 を超えているとは

いえ全項目内で最も低い平均であり、これらの項目は今後の授業改善に向けて留意すべき点であろう。

表3 質問項目および質問項目区分

	質問項目	
1	この授業を登録するとき、シラバス（履修の手引き）は役に立ちましたか。	3.72
2	シラバスの内容は、実際の授業とほぼ同じですか。	3.81
3	この授業の開始時間、終了時間はほぼ守られていますか。	4.07
4	授業の進行速度（速い、遅い）は、丁度いいですか。	3.81
5	この授業は、役に立つと思いますか。	3.90
6	教員の話し方は聞きとりやすいですか。	3.87
7	教員の準備がよくされていると感じられる授業ですか。	3.91
8	この授業で要求されるレポートなどの課題は適切ですか。	3.77
9	授業中、発言、自主学習、作業などの学生の参加ができていますか。	3.75
10	教員は学生の質問や意見に対応してくれていますか。	3.91
11	この授業は、全体的に満足していますか。	3.81
12	板書、プリントなどで、授業は効果的だと思いますか。	3.84
13	マイク、スライド、パソコンなどの機材が、効果的に使われていますか。	3.68
14	あなたは、この授業に意欲的・積極的に取り組んでいますか。	3.90
15	あなたのこの授業の出席率は、何%くらいですか。	4.23

次に、項目区分別の集計結果を見ると、以下の表4のような結果となった。項目区分Dの「学生の自己評価」が平均4.06（項目14が3.90、項目15が4.23）と最も高い。授業での自己評価の高い学生は授業評価も高まるという先行研究⁶⁾があるが、学生の自己評価と授業評価との関係については後に検討する。一方、最も低いのは区分Aの「授業の準備や工夫」の平均3.81であるが、これは項目1の「効果的なシラバス」の平均が低いことが影響している。

表4 項目区分別の集計結果

区分	授業評価項目の区分	質問項目	平均値	100点換算
A	授業全体	Q3. Q8. Q9. Q11	3.85	77
B	授業の準備や工夫（教材・設備の充実）	Q1. Q2. Q7	3.81	76
C	授業の様子（指導の仕方）	Q4. Q6. Q10. Q12. Q13	3.82	76
D	学生自身の状況（達成度・自己評価）	Q14. Q15	4.06	81
E	授業のあなたへの効果（理解度）	Q5	3.90	78

以上のように、今後の授業改善を進めていく上で課題となる点も幾つか見られたが、全体としては良い評価が得られている。

3.2. 授業評価のクロス集計と相関分析

次に、クロス集計であるが、本論では「授業種類」および「授業の履修登録者数」の項目と総合評

⁶⁾ 上述の松田文子他（1999）の他に、笹尾敏明・小山梓・池田満（2003）「次世代型ファカルティ・ディベロップメント（FD）・プログラムに向けて：コミュニティ心理学的視座からの検討」『国際基督教大学学報教育研究』Vol.45, pp.55-71などがある。

価をクロスさせたものに留めておく。授業の種類は本学カリキュラムに合わせて「セミナー（ゼミ）」「語学」「ベーシックス（教養科目）」「スペシャリティ（専門科目）」「ベーシックス（1年生のみ）」に区分した。本学は2007年度において2年生以上向けのカリキュラムと1年生向けカリキュラムが並存しており、ベーシックス（教養科目）も1年生配当科目と2年生以上の配当科目で分けて集計した。また、履修登録者については「30人未満」「30～49人」「50～69人」「70～89人」「90人以上」に区分した。共に回答者数10人以上の授業のみを集計の対象とした。結果は、以下の表5の通りである。

授業種別ではセミナーの総合評価が4.22と最も高く、次がスペシャリティの3.85である。登録者数別では30人未満が4.01と最も高く、次が70～89人の3.89である。授業種別の区分と登録者数別の区分の関係を検討していないが、ゼミ科目（セミナー）や専門科目（スペシャリティ）は比較的登録人数が少ない科目である。以上のことから、授業のクラス規模の小ささが授業評価に良い方向で関係していることが考えられる⁽⁶⁾

表5 項目区分別の集計結果

	項目	平均	平均点の分布の割合 (%)			
			1～2 未満	2～3 未満	3～4 未満	4～5 未満
授業種別	セミナー	4.22	0.0%	0.0%	30.0%	70.0%
	語学	3.80	0.0%	0.0%	60.0%	40.0%
	ベーシックス	3.80	0.0%	6.3%	56.3%	37.5%
	スペシャリティ	3.85	0.0%	0.0%	60.9%	39.1%
	1年生ベーシックス	3.63	0.0%	6.3%	75.0%	18.8%
登録者数別	30人未満	4.01	0.0%	4.0%	40.0%	56.0%
	30～49人	3.74	0.0%	4.0%	64.0%	32.0%
	50～69人	3.70	0.0%	0.0%	81.8%	18.2%
	70～89人	3.89	0.0%	0.0%	55.6%	44.4%
	90人以上	3.57	0.0%	0.0%	80.0%	20.0%

次に項目間の相関関係を見ると、以下の表6のような結果となった。授業の総合評価であると考えられる項目5「授業の効果」と項目11「授業への満足度」に高い相関を示しているのは、項目5では項目6「教員の話し方」(0.73)、項目7「教員の準備」(0.73)、項目12「効果的な板書・プリント」(0.73)である⁽⁷⁾。項目11では項目1「効果的なシラバス」、項目3「開始・終了時間の厳守」、項目13「設置機器の効果的使用」、項目15「出席率の自己評価」を除いて、全ての項目で高い相関が見られた。特に、項目12「効果的な板書・プリント」(0.79)、項目7「教員の準備」(0.77)、項目6「教

⁽⁶⁾ 同様の結果は、以下の研究においても見られる。磯谷彰男 (2003) 「授業調査からみた授業改善の一考察」

『NUCB journal of economics and information science』Vol.48, No.1, pp.139-156.

⁽⁷⁾ ここでは、相関係数0.7以上 [強い相関がある] を示しているものを抽出している。また、項目5と高い相関を示しているものとして、項目11は全体評価の項目であるため除外した。

員の話し方」(0.76), 項目 10「質問・意見への対応」(0.76) が項目 11 と高い相関を示している。以上のことから, 授業改善による授業評価の向上を目指すには, 項目 6「教員の話し方」, 項目 7「教員の準備」, 項目 12「効果的な板書・プリント」の改善が重要であることが推測される。

逆に, 項目 15「出席率の自己評価」では, その他のほとんどの項目と弱い相関しか見られなかった。ただ, 授業評価との相関が見られないとはいえ, 単位の取得状況との比較もしなければ, 学生の出席を軽視しても構わないと, 出席率について安易に断じられない。

また, 他の項目と相関する頻度が高い項目として, 項目 11「授業への満足度」, 項目 6「教員の話し方」, 項目 7「教員の準備」, 項目 10「質問・意見への対応」, 項目 12「効果的な板書・プリント」がある。因果関係は不明であるが, 上記の項目のうち全体評価である項目 11 を除いた項目が授業評価全体を高めていくために重要な項目であると推測される。これらは全体評価である項目 5 と項目 11 にとっても重要な項目であった。

表 6 項目間の相関関係

	Q01	Q02	Q03	Q04	Q05	Q06	Q07	Q08	Q09	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	相関
Q01		0.81	0.60	0.62	0.65	0.65	0.67	0.65	0.60	0.63	0.67	0.65	0.55	0.62	0.33	1
Q02			0.65	0.69	0.68	0.71	0.73	0.71	0.64	0.70	0.72	0.69	0.60	0.63	0.39	6
Q03				0.66	0.60	0.63	0.67	0.62	0.52	0.62	0.61	0.62	0.50	0.58	0.39	0
Q04					0.65	0.72	0.71	0.68	0.59	0.63	0.70	0.67	0.57	0.61	0.36	3
Q05						0.73	0.73	0.68	0.63	0.67	0.73	0.70	0.56	0.68	0.42	4
Q06							0.79	0.74	0.62	0.71	0.76	0.71	0.58	0.65	0.39	8
Q07								0.77	0.65	0.74	0.77	0.74	0.62	0.68	0.42	8
Q08									0.63	0.72	0.74	0.73	0.60	0.68	0.39	6
Q09										0.73	0.72	0.65	0.59	0.65	0.36	2
Q10											0.76	0.73	0.59	0.66	0.42	7
Q11												0.79	0.64	0.74	0.41	10
Q12													0.66	0.70	0.41	7
Q13														0.60	0.35	0
Q14															0.51	2
Q15																0

次に, 個別の項目について検討する。まずは評価項目 7「教員の準備」である。これは, 教員の教育への熱意を代弁する項目と読み取ることもできる。その項目 7 は項目 6「教員の話し方」(0.79) とかなり高い相関を示している。ここから, 学生が教員の授業への熱意を測る指標として「教員の話し方」が大きく影響を与えているのではないかと推定される。

項目 14「受講意欲の自己評価」は学生の自己評価として特に重要な項目と考えられるが, 項目 11 を除いては項目 13「効果的な板書・プリント」がやや高い相関を示している。授業評価にとって学生の自己評価は様々な意味で重要な意味を持つが, 学生は授業で行われる板書や配布されるプリントのあり方を通して授業への積極性や意欲を評価しているのかもしれない。また, 項目 14 を軸に全体

評価である項目 5 と項目 11, 全体平均をクロス集計させると, 以下の表 7 の通りの結果となった。項目 14 の評価段階の上昇と共に, それぞれクロスさせた項目の平均が高まっている。このことから, 自己評価の高い学生は高い授業評価をしていることが分かる。あわせて, 項目 14 との相関係数も項目 5 で 0.68, 項目 11 で 0.74 と両項目とも高い数値を示している。

学生の自己評価の高まりが授業評価を高めることが, 本学の授業評価においても確認できた。

表 7 評価項目 14 を軸としたクロス集計 (平均)

項目 14 の回答	項目 5	項目 11	全体
1	1.88	1.49	1.96
2	2.88	2.61	2.83
3	3.26	3.13	3.26
4	3.91	3.80	3.86
5	4.69	4.68	4.64

4. おわりに

本論では, 京都創成大学の 2007 年度授業評価における改善と集計分析をまとめた。実施方法の改善として「学生による評価票の回収」による学生による自由な評価の保障, 「留学生向け評価票の作成・利用」による評価精度の向上, 「評価対象科目の拡大」を行った。評価票の改善として「評価票の変更・追加」と集計結果の分析を前提とした「評価項目の分類区分の追加」と行った。

そして, 集計結果を分析した結果, 評価項目全体として平均 3.87 (5 段階評価) を示し, まずまずの評価であった。授業の全体評価である項目 5 「授業の効果」と項目 11 「授業への満足度」においても, 平均以上の評価を得た。クロス集計の結果, クラス規模が小さな授業科目で授業評価が高くなる傾向が見られた。相関関係の分析では, 授業改善には項目 6 「教員の話し方」, 項目 7 「教員の準備」, 項目 12 「効果的な板書・プリント」が関係していることが, 項目 5 と項目 11 との関係から見られた。学生の自己評価の授業評価への影響は先行研究で指摘されているが, 本評価においても同様の状況が確認された。

以上のように, 2007 年度前期 Semester 授業評価は良好な結果を得ることができた。しかしながら, 授業評価は FD につながるにより始めて意味を持つと考える。通常, 授業評価を参考データとし FD や授業改善を進めていくが, 授業改善プロセスを「Plan→Do→Check→Action」と捉えた場合, 授業評価は「Check」に相当するものでしかない。残りのプロセスを通して授業改善プロセスをどのように効果的に展開していくかが授業評価には求められる。また, 授業評価にとっても授業評価の結果による検証だけでなく, 授業改善や FD を通して授業評価のあり方を検討・検証することが, より効果的な評価につながると考えられる。

今後の課題として, 第一にクロス集計における対象項目の拡大があげられる。今回の分析よりも, さらに多くの示唆を得られるであろう。第二に, 集計分析を各項目間の相関関係からさらに因果関係

に踏み込むことあげられる。授業評価を授業改善、FDにつなげることためには、各項目間の因果関係は非常に重要である。第三に、2007年度後期 Semester の授業評価を集計データを加えて、再集計・分析を行うことがあげられる。一年を通じたデータの集計により、さらに多面的な分析が可能となるであろう。

さらに、今回の授業評価から離れるが、個々の授業評価項目のより細かい要因の検討が必要であろう。例えば、教員の効果的な話し方はどのようなものか、効果的な板書やプリントはどのようなものか、などである。以上のようなレベルにまで評価項目の分析を深めることによって、より具体的で効果的な授業改善・FDにつながるものと考えられる。

以上の点に配慮しながら、京都創成大学における授業評価をさらに良いものにしていきたい。

最後に、本報告を作成するにあたり、授業アンケート実施において実務的な作業をしていただいた京都創成大学教務課の皆様、授業アンケートの集計作業をしていただいた京都創成大学ネットワーク管理室の皆様、アンケートにご協力いただきました全ての学生と教員の皆様に心より御礼申し上げます。本報告が京都創成大学の授業改善の一助となれば幸甚です。

(完)